

◆特集 「海外の現代民俗学—欧米編」

現代アメリカ民俗学の現状と課題

— 公共民俗学 (Public Folklore) を中心に —

菅 豊

はじめに

私たち日本の民俗学研究者は、アメリカ民俗学に関して無知である。アメリカ民俗学をリードするアメリカ民俗学会 (American Folklore Society: AFS)、そして、それをプラットフォームとして研究する人びとと、その研究内容について私たちはほとんど知らないし、また十分に知ろうとできなかった。これまで、日本におけるアメリカ民俗学の紹介はそれほど活発になされず、また、なされていたとしても散発的な紹介でしかなかった。

一九世紀末にアメリカ民俗学が萌芽し、それは文学的研究と文化人類学的研究を吸収しつつ、かつ両者の軋轢を生み出しつつ、いまのアメリカ民俗学を形作ってきた。フォークロアが自然と形成され実体となったと想像する自然主義や、また、精神的に純粹で本質的な過去の存在を想像するロマン主義に彩られていたアメリカ民俗学の歴史については、その初期の学史を取り扱った日本語著作〔堀 一九六〇、ドーソン 一九八一など〕にも紹介されているので本論では割愛する。もともと、その時代のアメリカ民俗学の状況は、現代アメリカ民俗学の状況とは懸隔が甚だしいのだから、いまのアメリカ民俗学を知るためには、あまりそれらを睨み合わせる必要はないであろう。本論では、現在のアメリカ民俗学を理解する上で欠かせない学問の流れと方向性の「一部」について論述する。それはほんの一部であるが、私たち日本で民俗学を学ぶ者たちが、自らの学問の歴史と現状を照らし合わせ、まさに他山の石とできる

重要な論点を含んでいる。

一 フォークロアという憂鬱

現在、アメリカ民俗学は、アメリカのアカデミズムのなかにおいて、活況を呈しているとは言いがたい。むしろ、それは学問世界の中心から離れたところに位置する弱い専門分野になっている。しかし、この不振は何もアメリカ民俗学に限られたことではない。日本でも「落日の中の日本民俗学」〔山折 一九九五〕が喧伝されて久しいが、そのような不振状況は世界に共通する民俗学の現実問題なのである。

日本で「民俗」という言葉は、一般社会で用いられる日常語ではなく、民俗学を専門とする研究者や学生、行政担当者、そして、一握りの知識人しかそれを用いていない。それら以外の人びとに「みんぞく」という言葉を発したとき、一般的に「民族」という言葉が連想されるであろうし、たとえ「民俗」という漢字を教えたとしても、その意味内容を的確に把握できる人びとは、さほど多くはない。「民俗」という言葉は、日本において社会と切れた表現になっている。一方アメリカでは、フォークロア (Folklore) という言葉は、文化の一部としてレイベリングされる「民俗」と、それを研究するディシプリンとしての「民俗学」との二つの側面をもつが、いずれにしろ日本と同じく社会で積極的に用いられない言葉なのである。さらに、用いられたとしても、それはネガティブで侮蔑的なイメージを埋め込まれた言葉として使用されている¹⁾。

しかし、その芳しくない社会的評価に、アメリカ民俗学者たちは、為す術なくただ手を拱いてきたわけではない。その評価を覆すべく、アメリカ民俗学では、その学問の対象と学問分野を切り分ける努力もなされてきた。

一八四六年にウィリアム・トムズによってfolkloreという言葉が造語されて一五〇年たった記念すべき年（一九九六年）に、AFS年次大会において、会長ジェーン・C・ベック (Jane C. Beck) は、その会長講演で「実績を評価する (Taking Stock)」と題して、研究分野としての「フォークロア」という名称や内容を現代的に問い直す必要性

について語じた〔Beck 1997〕。これを受けて、レギナ・ベンディックス (Regina Bendix)、『ダン・ベン・アモス (Dan Ben-Amos)』、『グレゴリー・シュレンプ (Gregory Schrepp)』、『バーバラ・カーシェンブラット・ギンブレット (Barbara Kirshenblatt-Gimblett)』、『ヘンリー・グラッシー (Henry Glassie)』といった錚々たる面々をパネリストとして、「フォーククロアという：引用者注 名前に何が込められているのか? (What's in the Name?)」と題する全体会議が開催された。そこでは、「アメリカ民俗学者が実際にやっている仕事と、彼ら彼女らが興味をそそる文化の領域とを説明するのに、フォーククロアという言葉がいまだ有効かつ適切な方法だろうか?」「フォーククロアの名前を変えることが、民俗学者たちによって認識されている専門分野のアイデンティティ・クライシスを解決できるのだろうか?」「フォーククロアはそれ自体周縁的であるにもかかわらず、フォーククロアの分野で展開された理論は、なぜ学問領域で生起する議論の中核をなすのだろうか?」「素材としてのフォーククロア、そして、専門分野としてのフォーククロアの、現在(一九九六年)における地位とは何だろうか?」という、学問の根本的課題が討議された。

たとえば、ベンディックスは、フォーククロアという名称が、絶え間なく制度的に周縁化されてきたという理由から、フォーククロアという名称からの解放を求め、フォーククロアは、多様な研究分野としては不適切な研究分野名であると主張した。彼女は、名前を変えることが学問の内容を変えたというヨーロッパとくにドイツの民俗学の経験に基づき、アメリカ民俗学者が、アカデミズムと一般社会におけるフォーククロアの占める位置を明確にすることの必要性と、その困難さについて吐露している〔Bendix 1998〕。

また、カーシェンブラット・ギンブレットは、他の研究分野に所属して雲散霧消しつつある民俗学者と、他の分野に包含されてしまったフォーククロアの危機を憂い、アメリカ民俗学の歴史の知的批判検討を通じて、アメリカ民俗学が陥った因果について詳説している。彼女は、現代社会に見られる「口頭性 (orality)」「一時性 (temporality)」「科学技術 (technology)」「文化生産 (cultural production)」の結び付きが、今日のアメリカの学術世界におけるフォーククロアが直面する危機を知るための手がかりとなるとする。社会の現代化は、デジタルメディアの登場により口承性に限界をもたらす、学問と公共部門とは新たな関係を生み出し、また、フォーククロア研究の政治性が露見することとなっ

た。そのような状況で、いまアメリカ民俗学が対処できることは、第一にフォーククロアへの誤解を解くか、第二に実体に合わせてフォーククロアに代わる新しい名称を作るか、第三にここで起こっている問題に関わるアメリカ民俗学の歴史を批判的に再考するか、という選択肢しかないとする。そして、彼女は第三のアメリカ民俗学の批判的歴史検証 (批判的学史検討 critical histories) による学史研究 (historiography) を選択し、多岐にわたる問題群を詳細に検討することによって、アメリカ民俗学が根源にもついていた瑕疵を明らかにした。その結果、フォーククロアは、分野の名称と意味されるものとの乖離がさらに広がっているとする〔Kirshenblatt-Gimblett 1998〕。

一方、このような、アメリカ民俗学の現状への危機意識と、その速やかな更改を求めめる意見に対してベン・アモスなどは反駁している。彼は、現在のフォーククロアの危機は、単なる名称上の問題にあるのではないとする。むしろ、それはアカデミーから公共部門に移行したアメリカ民俗学者の行動のなかにあるのであって、それゆえ名前の変更は実質的な解決にはならず、むしろフォーククロアの名称を維持することで、ディシプリンとして既に分野化された知的枠組みのなかに、新しい方向性を策定する手法を提供できるとする〔Ben-Amos 1998〕。

このようなフォーククロアという言葉に込められた不自由さと問題点に関する検討は、一九七〇年代からアメリカ民俗学界ではなされておき、いわゆる対象としての民俗と、学問分野としての民俗学とを切り離して、ディシプリンに「フォークロリスティクス (folkloristics)」の語を用いるべきであることが主張されている。研究分野を表現するにあたってふさわしい用語として提唱されたフォークロリスティクスの語自体は、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、既に北欧や東欧で用いられてきたものであり、とくにソビエトの著名な民俗学者・ユーリー・ソコロフ (Yuriy Sokolov) などによって、一九三〇年代には学問分野を指し示す専門用語として用いられていた〔Kirshenblatt-Gimblett 1985 : 331〕。そしてこの語は、一九七〇年代以降、多くのアメリカ民俗学者によって用いられてきた〔Burns 1977, Dorson 1982, Owen Jones 1982, Dolby-Stahl 1985, Jackson 1985, Kirshenblatt-Gimblett 1985, Abrahams 1993a, Briggs 1993, Georges and Owen Jones 1995, Montenyohl 1996 など〕。しかしこの学問の改名の動きは必ずしも成功したとはいえず、その語の定着度は必ずしも高いとはいえない。結局は、学問名称の更改を原動力として

学問自体を更改する運動は十全な成果を上げることができず、フォークロア研究者はいまだその不遇を託つ状況にある。

二 フォークロアの転換—公共民俗学の生成—

以上のように、アメリカ民俗学は、アカデミズムのなかで不振に喘いでいることは間違いない。それでは、アメリカ民俗学は日本の民俗学と比べ、研究の上で劣っているのであろうか。その答えは否である。

二〇世紀末からのアカデミズムにおける地位低下と、学問としてのアイデンティティ・クライシスに苛まれているアメリカ民俗学ではあるが、そのような状況下における多彩な努力と創意は、日本の民俗学と比べると、はるかに先鋭的であり意欲的なものである。その先鋭的で意欲的な努力を以てしても、アカデミズムのなかで十全たる地位を獲得できないということがアメリカ民俗学の問題なのである。誤解のないように言い添えるならば、同時代的に見て、日本の民俗学は何ら先鋭的な動きを見せず、また、大きな変化への意欲ももってこなかったことからいえば、現状、アカデミズムのなかで成功しているとは言い難い状況にあるアメリカ民俗学とはいえ、そう簡単に侮ることなどできない。むしろ、この数十年間、ほとんど変わることができなかった日本の民俗学は、いまこそアメリカ民俗学を他山の石として学ばなければならないのである。

周知の通り、アメリカの民俗学者は、社会の現代的变化と、それにもなう学問の内省によって、従来の概念や定義を再検討し、ときにはかなり思い切った変化をその研究のなかにもたらした。近代アメリカ民俗学の黄金期ともいえる一九六〇〜七〇年代にかけて、若手研究者を中心にコミュニケーション理論やパフォーマンス理論が提唱され、歴史主義からの脱却とプロセス研究への移行が推進され、それにもなうフォークロアの基本概念の再検討、そして更改作業がなされてきたのである。たとえば、有名なところでは、ダン・ベン・アモスによって研究対象としての「フォークロア」を、「小さな集団における芸術的コミュニケーション (artistic communication in small groups)」

と再定義することが主張され (Dan Ben-Amos 1972)、またアラン・ダンデスによって、それを保持する集団である「フォーク (folk)」を、「どんな集団であれ、少なくとも一つの共通した要素を共有する人びと (...any group whatsoever that shares at least one common factor)」(Dundes 1986) と再定義することが主張された。もちろん、現状でもこのような定義がアメリカ民俗学者のすべてに受け容れられているかというといささか心許ないが、少なくとも二〇世紀末から、このような定義は優勢となり、その更改を通じて研究の対象はジャンルも変化させてきているのである。その結果、アメリカ民俗学は、都市や農村といった空間的バウンダリーを消滅させ、農民の祭りから路上パフォーマンスまでを対象化できるようになった。また、歴史という本質主義的な足枷からも脱却することが可能となり、時間的バウンダリーを消滅させて、いま眼前にある文化に「現代民俗 (living folklore)」そしてこれから生起する文化を対象化することが可能となったのである。

このようなラディカルな挑戦と概念の更改作業については、既に日本の民俗学でも二〇年以上も前から紹介されているが (アンダーソン 一九八五、一九八六、飯島 一九九〇、一九九八)、いまだ民俗学を「世代をこえて伝えられる人びとの集合的事象によって生活文化の歴史的展開を明らかにし、それを通して現代の生活文化を説明する学問」 (福田 二〇〇〇 六四〇) と定義し、世代連続性や歴史性から脱却していない日本民俗学の現状から見ると、アメリカ民俗学の状況は日本ではまだ十分に咀嚼されていないといえよう。

世界的に俯瞰するならば、一九六〇〜七〇年代に、各国の民俗学は大きな転換を遂げている。たとえば、ドイツ民俗学は、一九七〇年のファルケンシュタインにおける西ドイツ民俗学会において、民俗学は「客体及び主体に表れた文化的価値ある伝達物 (及びそれを規定する原因とそれに付随する過程) を分析する。この分析の出発点は、一般に社会的文化的な諸問題であり、その目的は社会的文化的な諸問題の解決に寄与することにある。」と定義転換され、また、民俗学 Volkskunde という名称はもはや適当ではないため、それをも更改する旨決議された (坂井 一九七二 五四〜五五)。アメリカでも、既に述べたようにフォークロアからフォークロリスティクスへの更改の動きや、ベン・アモス、ダンデスらのフォークロア、フォーク概念の更改の動きが同時代的に生起している。それは、一九六〇〜七〇年

代の学生運動など、社会変革を目指す大きな現実社会の動きと少なからず連動したものである。翻って日本を見るならば、同じくこの時代に変革を目指す社会運動が盛り上がりつつたにもかかわらず、日本民俗学はむしろアカデミズム化を進行させ、変革よりも保守的な学問の体系化と整合化を選択し、そこで形作られた状況が現在まで継続しているのである。

さて、そのような日本を除く世界的な民俗学の大きな転換期—一九六〇〜七〇年代—に、アメリカではさらなる民俗学の方向性の転換が行われていた。その方向性とは、「公共民俗学」(Public Folklore)である。この時代は「公民権運動とエスニック・リバイバルの六〇年代、建国二〇〇年の熱狂とルーツ探しの七〇年代と呼ばれる時代」(八木 二〇〇三:三七)であり、そのような時代を背景として、後述するような国家規模の公的支援を受けた文化政策—民俗をめぐる機関、組織、基金の創出—が展開され、それに多くの民俗学者が参画したのである。

公共民俗学とは、「伝統の担い手と民俗学者、あるいは文化に関する専門家との協働的な取り組みを通じて、コミュニティ内部、あるいはコミュニティを越えて表れる新しい輪郭線と文脈のなかにある民俗伝統(folk traditions)を表象し応用する」(Baron and Spitzer 1992:1)民俗学である。それは、「応用民俗学(applied folklore)」——公共民俗学の一群のものとして扱われる場合が多い——や「公共部門の民俗学(public sector folklore)」と表現されることもある。近年刊行された『アメリカ民俗学百科事典(Encyclopedia of American Folklore)』では「公共部門の民俗学として知られる公共民俗学は、アカデミー(大学などの研究主体の世界:引用者注)の外側で、フォークロアの展示や記録、振興などの試みと向かい合う」(Watts ed. 2007:319)学問ともされる。「公共民俗学」という表現は、アメリカで、一九八〇年代に入って広く使われ始めたが(Dorson 1982:97)それは、「ここ数十年を経て、アメリカの民俗学界で大きな地位を占めるに至った。

狭義の公共民俗学をより具体的に説明するならば、芸術や文化、あるいは教育などに関する非大学の組織機関で、応用的見地からなされる民俗学的な研究や活動を指す。たとえば、公共民俗学を標榜する民俗学者の多くは、主とし

て芸術などの文化的な審議会や、文化遺産に関わる歴史系の協会、図書館、博物館、コミュニティセンター、小中学校などの教育機関、非営利の民俗芸術や民俗文化組織などで活躍している。彼ら彼女らは、フィールドでの調査、記録のみならず、たとえば、パフォーマンスや民俗芸術の専門教育、展示、催事、音声記録、ラジオやテレビ番組、ビデオや書籍などの公共的なプログラムや教育関係の素材を生み出す活動に従事している。

アメリカでは、所属する機関や職業的ミッション(任務、使命、目的)に対する意識が鮮明で、その区別は研究の方向性や対象、方法というものを大きく規定している。単純にいうならば、大学を中心とするアカデミーに所属し、もっぱら専門教育と自己完結的な研究にいそむ研究者は「アカデミック民俗学者(academic folklorist)」とされ、博物館や文化行政など公的な機関に属する研究者は「公共民俗学者(public folklorist)」と区別される。さらに、職業的にはどこにも属さないが、公的な基金や支援を受けて社会貢献活動に従事する研究者は「独立した民俗学者(independent folklorist)あるいはself-employed folklorist)」などと称されるが、広義には彼ら彼女らの活動も公共民俗学に含まれる。また、大学の研究者のなかにも、当然、公共的な活動に参画する者も数多く存在し、それらの活動も現在では広義の公共民俗学に含まれる。二〇〇二年のAFSの調査によると、四八五名の会員、すなわち約四四パーセントのAFS会員が公共民俗学者としてのアイデンティティをもっているという。その数には、公共部門で職を得ている民俗学者でありながらAFSには加入していない人びとや、あるいは、アカデミック民俗学者でありながら公共部門のプロジェクトに関わっている人びとは含まれていないので、少なくともアメリカ民俗学者の半数は、公的領域(public sphere)に何らかの形で関与しているものと推測されている(Wells 2006:7)。

これまで、このアメリカの公共民俗学に関して、日本ではいくつかの著作や口頭発表等で紹介されているが(飯島 一九九八、八木 二〇〇三、二〇〇六、小長谷 二〇〇六、菅 二〇〇六、二〇〇八)、「公共民俗学」という民俗学の方向性自体は、いまだ十分に日本の民俗学に浸透していない。日本でもアメリカと同じく、民俗学を専門とする多くの研究者が、博物館や地方公共団体、教育機関等の公共部門において活動を行っており、他のデイシプリンと比べ特徴的な学界状況を呈しているが、そのような公的領域における活動は積極的に研究の俎上には載せられてこなかつ

た。もちろん、日本においても文化財や無形文化遺産などに関する文化政策や、「地域おこし」に代表される文化資源としての民俗の応用という問題が、現前の重要課題として現代民俗学のなかに立ち現れており、そのような問題は一九六〇年代のドイツ流のフォークロリズム的分析視角から批判検証されているものの、残念ながら、それを民俗学研究者自らが、主体的に選択し表象し応用し実践するという公共民俗学の観点からはとらえられていない。

三 公共民俗学の前史

アメリカにおいて、公共民俗学の活動は一九六〇〜七〇年代に大きく成長し、その名称は一九八〇年代になって広く用いられるようになったが、現在のアメリカ民俗学では、その歴史はさらに遡って措定されている。現在、アメリカ民俗学内部において公共民俗学の存在感が増すにしたがって、その観点からアメリカ民俗学史が読み直されているのである。なぜならば、かつて公共民俗学的研究や活動は、後述するように学界の覇権を握っていたアカデミック民俗学の立場から否定的に扱われており、その学史にはほとんど登場しなかったためである。現在では、まさに「復権」といつて良いほど、かつての公共民俗学的活動の再評価が行われており、それにもない「公共民俗学の正史」が構築されつつある。そのような正史からいえば公共民俗学の歴史は、かなり古いところにまでその淵源が遡及される。そして、その歴史は、アメリカにおける国家の文化政策と軌を一にするものである。

アメリカにおいて公共民俗学は、芸術や文化に関する他の学問以上にアメリカ連邦政府の支援を広範に受けたものであった。その観点からいえば、最初のシステマティックな公共民俗学は、一八七九年に設立された「米国民族学局 (The Bureau of American Ethnology: BAE、前身は Bureau of Ethnology)」の活動に端を発するとされる [Baron 2007: 66]。それは連邦政府の一部門であり、南北戦争の退役軍人であるジョン・W・パウエル (John W. Powell) を中心として、ネイティブ・アメリカンの口承文芸や物質文化、習慣、信仰システムなど多岐にわたる文化を大量に記録、収集した。この機関は、アメリカの民俗学や人類学—その頃は不分明だった—の発展に寄与したフランツ・ボアズ (Franz Boas) なども支援しており、ネイティブ・アメリカンの文化研究と保存に実践的に寄与している。

次に、アメリカの公共民俗学の大きな画期となったのが、一九二八年の「連邦議会図書館 (The Library of Congress)」における「米国民族学局 (Archive of American Folk Song)」の設立である。フォーク・カルチャー・アーカイブ (Archive of Folk Culture) に改組) の設立である。フォーク・カルチャー・アーカイブの民族誌的なコレクションは多種多様であり、一〇〇万点以上の写真や記録原稿、音声記録などが国際的に収集されている。その機関において重要な役割を果たしたのがアラン・ロマックス (Alan Lomax) である。彼は、アメリカのポピュラー音楽、民族音楽の収集、研究に大きく寄与した民俗学者・民族音楽学者であり、父ジョン・A・ロマックス (John A. Lomax、一九二一〜一九三三年に AFS の会長を務める) とともに、アメリカのフォーク・ソングの発掘、収集、記録、保存に努め、多くの著作を残すとともにミュージシャンとしても活躍した。彼は、一九三六〜一九四二年に「米国民族学局・ソング・アーカイブ」を管理する助手になり、父とともに一万以上の地点でフォーク・ソングを収集した。その貴重なコレクションは、一九七八年以降「米国民族学局・センター (American Folklife Center)」に帰属している。その成果は、一九六〇年代からのフォーク・リバイバルやエスニック・リバイバルなどの運動のなかで起こった民族音楽への関心の高まりとともに評価を高めた。

さらに、ロマックスは、「連邦作家プロジェクト (Federal Writers' Project: FWP)」のフォークロア編集者としても活躍した。この FWP とは大規模な文化政策であり、この時代の公共民俗学を考える上で無視できない大きな画期であった。それはフランクリン・ルーズベルト大統領によって主導されたニューディール政策にともなう「フェデラル・ワン」という、芸術家のための失業救済事業の一環として行われた。一九三五年から開始され、地方史、口述史、民族誌、児童書などの編纂事業を国家の支援のもと展開し、大恐慌下で失業した作家、編集者、歴史家、文芸批評家、考古学研究者、地理学研究者など約六、六〇〇名を動員した。このプロジェクトによって、アメリカ各地の「歴史」「文化」「伝統」「自然」「民俗」が収集され記録され、その成果は、アメリカの各州を紹介した『アメリカン・ガ

イドシリーズ (American Guide Series)』としてまとめられた。この本は、F W P が作家たちの収集したフォークロアを整理し各州で発行したもので、内容は州レベル、市レベルの記述である。一方、それは総体として「アメリカ」という国家の文化構築に寄与し、大恐慌に喘ぐアメリカ国民の文化的統合を企図してなされたものであった。

しかし、このような国家主導の文化政策である F W P を、現代風のありがちな「国家ナショナルリズムによる文化構築」という単純な構図から短絡的に評価してはならない。その時代は、世界的に見て、民俗が資源視された時代であり、片やドイツにおいてそれはナチス・ドイツの政策的な資源とされ、片やソ連ではマルクス主義に基づいてプロレタリア文化を体現するものとして評価され利用された。一方、アメリカの F W P では、同様の国家によるフォークロアの積極的利用があったものの、それとは裏腹に実際の参画者は左翼的性格を有していた点が特徴的である。そのため、F W P で集められた資料には、工場労働者の語りや、いまだ差別されていたアフリカン・アメリカンやネイティブ・アメリカン、その他移民などマイノリティからのオーラル・ヒストリーの聞き書きが多数含まれており、当時のロマン主義的なアカデミック民俗学の内容から逸脱するものであった。実は、この F W P には、失業した文学者とそれを組織化した左翼系団体なども関与しており、「左翼文学運動に参加していた人たちは、その (F W P) 引用者注」発足のためにも実施段階においても大きく貢献した」のだという (村山 二〇〇三 三七)。

さて、この F W P においてロマックス以上に重要な役割を果たし、そして現在「公共民俗学の父」として高く評価されている民俗学者に、ベンジャミン・A・ボトキン (Benjamin A. Botkin) がいる。ボトキンは、一九三八〜四一年、F W P の国家民俗編集者 (national folklore editor) に就任し、¹⁾ 実質的な F W P の責任者となる。彼はもとより、「フォーク・セイ (Folk say)」という言葉造語し、残存としての民俗ではなく、民衆のなかにいま生きている多様な文化、また、新たに生起する階級を越えた文化を重視し、民俗のなかの文学の価値とともに、文学 (とくに口承文学) のなかの民衆の価値に注目し、一般の民俗学者が看過する「人間」に関心をもち続けていた (Botkin 1931)。それゆえ、ボトキンは F W P で彼自身が主導したフォークロアの採集事業を、民衆のもつ価値を再認識させるための活動として、そして、民俗学者が収奪した民衆のフォークロアを、民衆に理解できる形で還元する活動として位置づけ

た (Botkin 1939: 10)。このようなフレイカルの思想からわかるように、彼は国家の文化政策の組織に深く関与していたものの、一方で少なからず、左翼的な文学運動に関わっていた (村山 二〇〇三 三八, Davis 2010)。既に述べたように、F W P の指導的な立場にあったボトキンばかりでなく、F W P に関わった文化人たちが、少なからず左翼文学運動に傾倒していたため、F W P 自体が国家の規制を受けつつも、その思惑とは相反してリベラルになり、当時の国家体制の否定につながりかねない動きとしてとらえられるようになった。そのため、第二次世界大戦に入ると議会などで F W P が非米活動 (un-American activities) と批判され、ついに一九三九年に連邦政府は、そのプロジェクトに対しての財政援助を終了し、州の財政援助も一九四三年で打ち切られた。

ボトキンはその後、音楽学者のチャールズ・シーガー (Charles Seeger) とともに、大量のアメリカ音楽の調査と記録のキャンペーンを遂行し、また、一九四二〜四五年には、先述した連邦議会図書館の「米国防ォーク・ソング・アーカイブ」の責任者となり、一九四四年には、若くして A F S の会長に就任する。その後、政府系の職を辞し執筆活動に専念し、F W P で収集されたものの埋没させられた資料を基に『アメリカ民間伝承の宝庫 (A Treasury of American Folklore)』 (Botkin ed. 1944) ²⁾ などにそれに連なる宝庫シリーズ (Botkin ed. 1947, 1955, 1960 など) を編集する。ボトキンにとって学問と民衆に向けた活動とは連続しており、これらの宝庫シリーズは民衆向けに平易にかつ「面白く」書かれていたため社会に順調に浸透し、『アメリカ民間伝承の宝庫』は八刷四〇万部に及ぶ大ベストセラーとなった。しかし、一方で、研究活動の民衆性の尊重を貫き通したボトキンは、当時、フォークロアのアカデミズム化を目指すアカデミック民俗学の厳格主義者たちにより、民俗学を「通俗化させる人 (popularizer)」として攻撃的になった。その攻撃の急先鋒となったのが、かの著名なリチャード・M・ドーソン (Richard M. Dorson) である。

アカデミック民俗学の巨頭ともいえるドーソンが、一九五〇〜六〇年代にかけてボトキンに代表される「応用民俗学」を、大衆迎合主義 (populism) で商業主義で非学問的であると見做し、ボトキンの著作にちりばめられている内容を「フェイクロア (fake lore)」と位置づけ痛烈に、かつ執拗に批判したことはあまりにも有名である。³⁾ ドーソンの批判

の言葉は、「……多くの読者が、アメリカ民間伝承の正確な資料を提供するはずの多くの文献に惑わされているのは不幸なことである。一九四四年の『アメリカ民間伝承の宝庫』で始まるベンジャミン・A・ボトキン編の宝庫シリーズは娯楽を目的にしたものであって、民間伝承としての資格を備えたものはそのほんの一部に過ぎない。児童向けの『民間伝承集』は役に立たない。……」(ドーソン 一九八一「一九五九」三九三〜三九四)という辛辣なものであった。ドーソンは、政治的にフォークロアが操作されたり利用されたりすることを執拗に非難し、ボトキンの著作の民衆性を批判するだけではなく、当時の反共運動「赤狩り」に乗じてボトキンの研究の政治的イデオロギーをも批判した。その反ボトキン・キャンペーンは、アメリカ民俗学会(AFS)内でのヘゲモニー争いの様相も呈し、一九五〇年代初頭には応用民俗学や、いまでいう公共民俗学に寛容だったアカデミック民俗学者たちが、こぞってそれに冷淡になり、社会実践に関わる民俗学者たちはAFSの周縁に追い込まれ、ボトキンやロマックスはアカデミック民俗学の正統学史から消し去られていった。^⑩

四 公共民俗学と文化政策

「それはアカデミズムにおける民俗学の地位を確固としたものにするための闘い」(八木 二〇〇三)でもあり、ドーソンはその闘いで一応勝利を得たといえる。一九六〇年代になると、AFSはほぼアカデミック民俗学者に主導権が握られるようになる。フォークロアは学者によって独占される優れた芸術ではなく、人びとによって共有されるものと考えたボトキンは、当然ドーソンと相容れることはなかったが——かつては親しい交友関係にあった——しかし、ドーソンの批判に直接応えることもなく、アカデミーにおける実践的、応用的活動は存在感を失った。

だが、このアカデミック民俗学の対応は、社会の対応とは大きくずれていた。このような民俗学の「純粋」な学問化とは裏腹に、ドーソンが不純と見なした実践性、応用性のある公共民俗学的研究の方が、むしろこの時代に適合していたのである。既に述べたように、一九六〇〜七〇年代は社会の大きな転換期であった。この時代、アメリカでは

公民権運動、学生運動、女性解放運動、マイノリティの権利闘争、ベトナム反戦運動などが激대화し、ボブ・ディランに代表されるフォーク・ソング・リバイバル運動などが生起する。このような運動と連動して国家は、本来、アメリカのアキレス腱ともいえる多様な人種・エスニック・グループが坩堝と化した状況を、「文化多様性(cultural diversity)」として尊重しながら、内実は、「多様性のなかの結束(unity in diversity)」によって一つのアメリカにまとめ上げる文化政策を活発化していく。

一九六五年には、ジョンソン政権下において「芸術人文科学国家基金法(National Foundation on the Arts and Humanities Act of 1965)」が制定され、これに基づいて人文社会系の研究者を支援する「全米人文科学基金(The National Endowment for the Arts: NEA)」や、芸術家を支援する「全米芸術基金(The National Endowment for the Arts: NEA)」などが設けられ、フォークロアの実践もそれに支えられた。さらに、応用民俗学・公共民俗学的なあり方を激烈に否定したドーソンがAFSの会長に就任した一九六七年には、皮肉なことに現在の公共民俗学の礎となった「スミソニアン全米フォークライフ・フェスティバル(Smithsonian Festival of American Folklife)」が、スミソニアン博物館に勤める民俗学者のラルフ・C・リンツラー(Ralph C. Rinzler)の主導によって開始された。それは、後にスミソニアン・フォークライフ・フェスティバル(Smithsonian Folklife Festival)へ改称され、二〇一〇年現在、四四回の開催を重ねている。六月末から七月頭にかけての十日間にわたってワシントンのナショナル・モールで開催されるそのフェスティバルには、全米各州、また多様なエスニック・グループから民俗音楽のミュージシャンやパフォーマー、民俗工芸家、ストーリー・テラー、料理人などが集結し、現在では海外の民俗文化に関する特集も組まれるほどまでに成長している。それは、単なる娯楽イベントではなく、民俗文化の学習センターとしての役割も果たしている。その企画・運営に公共民俗学者が深く関わっていることはいうまでもない。そして、さらにそのイベント自体が、現在では民俗学の研究対象となっているのである[Satterwhite 2008, Thompson 2008, Diamond and Trimillos 2008, Combs 2008, Straker 2008, Trimillos 2008]。

一九七〇年代に入ると、さらに公共民俗学が発展を遂げる。一九七四年、全米芸術基金(NEA)の「民俗芸術プ

プログラム (Folk Arts Program)」によって、民俗芸術やパブリック・アートの保存と表現に関し政府からの支援、育成が推進される。NEAは日本でいう文化庁的な公的役割を果たし、アメリカ国内の芸術文化活動を助成し、一九八二年からは、米国版「人間国宝」ともいえる「国家遺産フェロシップ (National Heritage Fellowships)」の指定なども行っている。次いで一九七六年には「米国民俗学保存法 (The American Folklife Preservation Act)」が制定され、「フォークライフ (folklife)」や「文化」「伝統」の国家的な位置づけが明確となった。この法律に規定された「フォークライフ」とは「米国内に存在する様々なグループが共有する伝統的な表現文化、すなわち家族・民族・職業・宗教・地域などに関わるものを意味し、表現文化は習慣や信仰、技能、言語、絵画、建築、音楽、劇、ダンス、ドラマ、儀式、見世物、手工芸といった創造的かつ象徴的で広範囲にわたる様式を含み、これらの文化表現は、主として口伝、模倣、実演によって体得され、普通は公教育や確立した指導法といったものの恩恵は受けずに維持されている」ものとされる。さらに、この法律に基づいて米連邦議会は、アメリカの民衆生活文化の保護や保存に取り組み始め、同年「米国民俗学・センター (American Folklife Center)」を、先に紹介した連邦議会図書館のなかに設置した。それは「民俗的伝統の展示や研究等、様々な表象に関わる活動について、専門のフォークロリストがその方法や方向性について利用者にレファレンスの助言を与えるだけでなく、また、フォークライフについての教育、展示、広報活動の促進を主な目的としている」機関である〔小長谷 二〇〇六 一三三〕。この機関の創出にあたっては、公共民俗学の中興の祖ともいえるアーチー・グリーン (Archie Green) が公共民俗学者の議会への働きかけ(ロビー活動)が功を奏した。

このような国家的な文化政策は、州政府などの地方における文化政策にも影響を与え、公共民俗学のニーズが社会的に高まることとなる。そして州、市政府レベルでも民俗学が応用される公的機関が創出され、それに応じて、アカデミック民俗学で教育を受けた研究者たちの社会的活躍の場(就職先)が増加した。以上のように、一九六〇〜七〇年代にかけて、現在、公共民俗学と呼ばれる民俗学の方向性が確かなものとなり、さらに一九八〇年代には連邦政府や地方政府の公共部門の文化政策や活動と連動しながら、それは発展してきたのである——アカデミズムや一般社会での学としての存在感は相変わらず低かったが——。それにとめない頑なに公共民俗学を排除してきたアカデミック民俗学においても、必然的にその議論の俎上に公共民俗学を載せることになる。一九八〇〜九〇年代にもなると、公共民俗学はアメリカ民俗学界の重要テーマの一つとなり、大いに議論が闘わされた。その議論は、民俗学の政治性や地域への介入という公共民俗学の性格と相俟って賛否両論渦巻いた [Ben-Amos 1998, Siporin 2000 など]。

五 公共民俗学の発展

岩竹美加子が指摘するように、一九八〇年代、アメリカを含む英語圏の人類学は、「リフレクシビティ (reflexivity: 再帰性、内省性)」「や」「表象の危機 (crisis of representation)」という形で、自らが使ってきた基本概念や学問の対象に対する歴史的態度の見直しを始めた。それは「我と我が身を振り返り、自己を客体化して歴史的、政治的文脈に位置づけ、それまでの学問の名において行なわれてきたことが純粹に学問のためだけであったと言えるのか、他者を表象する行為に内在する政治的意味は何かを問い直すという意味」〔岩竹 一九九六 九〇〜一〇〕があり、そのような人類学の自己内省運動からアメリカ民俗学は大きな影響を受けた。そのため当然、公共民俗学が孕む政治性や外部からの他者表象、商業化などの問題は、アカデミック民俗学の格好の批判的的となった。

先に紹介したバーバラ・カーシェンブラット・ギンブレットは、このような公共民俗学に内在する問題点とそれへの批判を巧く整理し、さらにそれを乗り越える重要な視点を含む論考を提示している [Kirshenblatt-Gimblett 1988]。彼女は公共民俗学の進展により、民俗学はディシプリンとして強化され、それにより職業の幅が拡大されて、民俗学は学生たちをリクルートすることに成功したという [Kirshenblatt-Gimblett 1988: 141]。しかし、それは助成金などを出す政府等の主張を無批判に「擁護 (アドボカシー: advocacy)」する危険性を孕んでおり、一方で、アカデミック民俗学はその擁護から離れて批判的な言説を立ち上げることができるとする [Kirshenblatt-Gimblett 1988: 142]。さらに、文化の所有や「表象行為 (representation)」がもつ権威性、民俗芸術の構築性、「文化の客体化 (cultural objectifica-

tion)』など公共民俗学のもっている問題点を指摘した。

しかし、彼女は、公共部門の行為がその行為に関わる人びと（役人や公共民俗学者）それ自体に変化を及ぼすインパクトを、民族誌的アプローチを通じて研究するという重要な役割をアカデミック民俗学が果たせると主張する [Kirschenblatt-Gimblett 1988: 152]。つまり、アカデミック民俗学と公共民俗学とを分断することは、「誤りの二元論 (mistaken dichotomies)」なのである。彼女が指摘した、公共民俗学をめぐるアドボカシーや表象、文化の客体化の問題は、現在でも公共民俗学の重要な論点、キーワードとして検討が繰り返されている [Baron 2007, 2009 など]。さて、一九九〇年代に入ると公共民俗学（応用民俗学も含む）の側からの多くの重要論考が発表されるようになる [Walle 1990, Abrahams 1993b, Baron and Spitzer 1992, Baron 1993, 1999, Briggs 1993, Kodish 1993, Montenyohl 1996, Beck 1997, Lloyd 1997]。その中でも重要なものが、ロバート・バーン (Robert Baron) とニコラス・R・スプitzer (Nicholas R. Spitzer) が共編著した『公共民俗学 (Public Folklore)』 [Baron and Spitzer eds. 1992] である。それは、公共民俗学に特化した初めての論集であり、公共民俗学のバイブルとすることも過言ではない。

一九九二年には、民俗の公共プログラムを数多く手がけたデイビッド・シュルディナー (David Shuldiner) を編集者として、『使われている民俗—実社会における応用 (Folklore in Use: Applications in the Real World)』という公共民俗学を主題化した雑誌が刊行され (九五年に休刊)、公共民俗学の実践に携わる研究者が現場に根ざした研究を発表した。また、民俗の多面的応用可能性をとりあげた『フォークロアを使う』 (Putting Folklore to Use) [Jones ed. 1994] や歴史や生物・文化多様性、フォークライフの一体的な保護を主張した『文化を保護すること—遺産に関する新シディスコース (Conserving Culture: A New Discourse on Heritage)』 [Hufford ed. 1994]、伝統的民間治療の応用性を検討した『伝統を癒すこと—代替医療と医療専門職 (Healing Traditions: Alternative Medicine and the Health Professions)』 [O'Connor 1995] など、公共民俗学に関する重要図書が矢継ぎ早に出されたのもこの時期である。ちなみに、AFSの学会誌 *Journal of American Folklore* と並んで、アメリカ民俗学界で権威のある雑誌 *Journal*

of Folklore Research の一九九八年刊三五巻三号では「応用民俗学」特集が組まれた [Shuldiner 1998, Hirsch 1998, Payne 1998, True 1998]。

一九九〇年代は、アメリカ民俗学界の重要課題として公共民俗学が位置づけられた時代であった。それは、もはやドーンが位置づけたような「不純」な民俗学ではない。それは、アメリカ民俗学にとって欠かすことのできない重要な方向性の一つにまでに成長したのである。その成長を示す象徴的な出来事として、先に紹介した一九九六年の AFS 年次大会における会長ジェーン・C・ベック (Jane C. Beck) の講演が挙げられる。彼女の「実績を評価する (Taking Stock)」と題する講演では、研究分野としての「フォークロア」という名称や内容について現在の問い直す必要性がある大きな根拠として、一九六〇〜七〇年代に学問のなかで橋頭堡を獲得した公共民俗学が、いま第二の拡大期にあるという現状を挙げて、その存在感の大きさを肯定的に取り扱っている。そして、いまがアカデミック民俗学と公共民俗学の裂け目を埋めるそのときだとまで述べ、アメリカ民俗学における民俗学の公共的展開の重要性を訴えている [Beck 1997]。

さらにもう一つ公共民俗学の成長を示す象徴的な出来事として、一九九八年ドイツのバート・ホンブルグ (Bad Homburg) で開催されたドイツ民俗学者との国際会議を挙げなければならない。バート・ホンブルグの会議は、「公共民俗学：社会における知的実践のかたち (Public Folklore: Forms of Intellectual Practice in Society)」と題して、直接、公共民俗学について言及する白熱した議論が闘わされた。紙幅の都合上、そこで提示された発表とそれへの応答を本論で詳らかに紹介することはできないが (詳細は本誌重信論文を参照のこと)、それは米独の民俗学への社会からの影響、そしてその影響下にあるそれぞれの民俗学に対するとらえ方の大きな相違を示すものとして興味深い。

周知の通り、ドイツ民俗学 (Volkskunde) は、第二次世界大戦前、戦中の第三帝国期に国民社会主義に加盟し、ナチス・ドイツの国策に取り込まれ、積極的に政治へ関わった。それへの反省からドイツ民俗学は、民俗学の政治性を自己批判し、民俗学像の根本的変革、再構築に取りかかった。その過程で、ハンス・モーザー (Hans Moser) やヘルマン・バウジンガー (Hermann Bausinger) などによりフォークロリズムという考え方が発案、推進された。そのよ

うな民俗、及び民俗学の政治性、民俗の利用ということに敏感なドイツ民俗学は、当然、アメリカで成長した公共民俗学のあり方には極めて慎重に対応せざるを得なかった。アメリカの公共民俗学は、民俗が存在する場に外部者として「介入 (intervention)」し、積極的にその利用や応用 (保護も含む) という「文化の仲介 (cultural brokerage)」行為に関与するのに対し、ドイツ民俗学は、民俗が利用、応用、仲介される場に直接関与するのではなく、フォークロリズム批判のように外部からその状況を評価し、批判する立場で関与するのであって、その学問のとらえ方には根本的な乖離がある。このようなアメリカ民俗学とドイツ民俗学の間に横たわる、二つの異なる価値や方向性、そして学問の帰結が、共通の尺度で理解できない状況を、カーシェンブラット・ギンブレットは「通約不可能性 (incommensurabilities)」と表現している (Kirshenblatt-Gimblett 2000 : 1-3)。

このような議論をめぐり、二〇〇〇年代に入っても公共民俗学に関する議論は衰えることはない。二〇〇〇年、AFS学会誌 *Journal of American Folklore* 一三巻四四七号では、公共民俗学に関する論考が集中掲載され (Zeitlin 2000, Coe 2000, Hamer 2000, Siporin 2000)、二〇〇二年のAFS年次大会では会長ベギー・バル (Peggy Balger) より、「これを再び振り返る、そして前へ進む—公共の専門としての民俗学の発展 (Looking Back, Moving Forward: The Development of Folklore as a Public Profession)」と題する会長講演がなされ、アメリカ民俗学がユニークな潜在能力をもっており、これまでの公共領域の問題とともに、知的所有権や文化遺産などのグローバルな課題にまでその力を発揮できることが力説された (Balger 2003)。また、二〇〇六年—一九巻四七一号では、「人びとのために、そして人びととともに働くこと—二一世紀の公共民俗学 (Working for and with Folk: Public Folklore in the Twenty-First Century)」と題する特集が組まれ、観光産業、公共の食文化啓発、初等教育といったなかでの公共民俗学の実践活動が紹介されている (Wells 2006, Dyen 2006, Rahn 2006, Chittenden 2006, Brewer 2006, Feltham 2006, Westernman 2006)。

かつてはアカデミック民俗学に独占されていた発表媒体でも、いまや十分に公共民俗学研究の議論が取り交わされるようになった。また先に述べたようにAFSという学会自体、人的構成はより公共民俗学に傾き、AFSの約半数

が公共民俗学者としてのアイデンティティをもつようになる。そして、クリントン政権時に全米芸術基金 (NEA) の第七代総裁 (一九九八—二〇〇一) を務め、その後オバマ政権の政権移行作業チームにも加わることになるビル・アイビー (Bill Ivey) という公共民俗学者中の公共民俗学者がAFSの会長 (二〇〇六—二〇〇七) に就任した。また、AFSにある三〇の分科会のうち公共民俗学者が集う「公共プログラム・セクション (Public Programs Section)」が最大規模に成長し、さらに公共民俗学の優れた業績に与えられる賞として、かつてドーンソンなどアカデミック民俗学が排斥したポトキンの名を冠する「ベンジャミン・ポトキン賞」が設立された。そして、二〇〇八年のAFSの年次大会は、公共の利益を生み出し維持する民俗学者のプロフェッショナルな役割を再評価するために「コモンズとコモンウェルス (The Commons and the Commonwealth)」という中心テーマが採用された。

このような二一世紀に入ってから数々の動きからわかるように、アメリカにおいて、いま公共民俗学のプレゼンスは高まり、また、民俗学の公共的な問題への関心も大きく高まっているのである。

おわりに

最初に述べたように、アメリカ民俗学における公共民俗学の発展とは対照的に、アカデミズム全体のなかでのアメリカ民俗学そのものの存在感はむしろ希薄化している。それは、公共民俗学のせいというよりは、アメリカに限らず世界的に共通するアカデミーの「純粋」な学問意識と実践軽視、それにもなう価値評価などの学問制度の偏りに起因するものと考えられる。そのような偏りに反駁し、学問の公共性を高める動きは、いまアメリカの文化人類学や社会学、歴史学のなかでも同様に取り組まれている。一九九〇年代以降の市民社会論を背景に「公共性の研究」が隆盛したが、その動きと軌を一にして「研究の公共性」、あるいは「学問の公共性」といった新しい研究の方向性がアメリカで生起している。それは、社会や現実問題への研究者の向き合い方、関わりのある方を問い直す動きである。たとえば、アメリカ社会学では、市民との対話を通じて学問が市民社会へと開き、さらに脱専門化する「市民と対話する

社会学」 「公共社会学 (Public Sociology)」が提唱されている (Burawoy 2005)。また、アメリカ文化人類学でも、アカデミズムを越えて、公共領域で人類学の活用を目指し、社会へ貢献する「公共人類学 (Public Anthropology)」が議論されている (Peacock 1998, Borofsky 2000)。学問の公共性への広がりには、このような人文・社会科学全体の動きのなかで、今後より浸透するものと考えられる。

翻って日本の民俗学を眺めてみると、いまだ「学問の公共性」に関する議論は十分に深められていない。また、日本にもアカデミック民俗学と、公共部門の民俗学という立場性が異なる民俗学が存在し、分離されてきたのにもかかわらず、その違いは隠蔽され続けている。すなわち、日本民俗学には、アメリカ以上に隠微な「誤りの二元論」が存在するのである。

日本民俗学は、その学問の初発に「学問救世」という目標を掲げ、「経世済民」を標榜し、宮本常一のような実践派の民俗学者を輩出した。また、多くの民俗学研究者が、学校や博物館、教育委員会などの文化の公共部門において社会と密接に関わる活動を展開してきた。しかし、一九五〇年代末からの民俗学へのアカデミズムの浸透にともない、そのような実践的目標と活動はアカデミック民俗学から分断され、アカデミック民俗学自体は現実社会から乖離した浮世離れの学問になってしまった。そのような状況のなか、学問を現実社会に引き戻し、学問と社会や人間との関係を再考するために、隠蔽された立場性を乗り越えて「学問の公共性」を眼目とした新しい民俗学の方向性を模索することが、いまの日本でも求められているのである。その際、アメリカの公共民俗学で問題となった「アドボカシー」や「文化の所有」「表象行為の権威性」「文化の客体化」「介入」「文化の仲介」などのキーワードは重要な論点となるであろう。

現在の新しい「公共民俗学」は、もはや単に公共部門の民俗学だけの問題ではない。それはアカデミック民俗学の問題でもあるのだ。それは、それぞれのミッションを規定している立場性を乗り越え、ともに民俗学を社会に開き、文化を以て何らかの実践を行い、地域社会や人びとの「幸福」を考える民俗学なのである。そのような民俗学では、カーシェンブラット・ギンブレットが既に指摘したような、アカデミック民俗学が、公共部門の行為やそれ自体に変化

を及ぼすインパクトを民族誌的に批判研究するといった第三者的、限定的な関与の枠組みすら乗り越えなければならぬ。これからの現代民俗学では、文化の所有権や表象行為の権威性という困難な問題があることを自覚しながら、あるいは戦略的に企図しながら、自分のフィールドの文化に直接介入し、その文化を客体化し、そして何らかのアドボカシー活動に関与し、さらにそれら総体の自己の行為をリフレキシブ (再帰的、内省的) にとらえ直す方向性が模索されなければならない——もちろんそれが地域の人びとに資する行為であらねばならないことは言を俟たない——。それは日本の民俗学がかつて掲げた本分を取り戻す方であるとともに、また、いまの民俗学を現代社会に対応する新しい民俗学へと「転回」するあり方なのである。いまこそ日本の民俗学は、「誤りの二元論」から脱却しなければならぬ。

《謝辞》

本稿の作成にあたって、ニューヨーク州芸術評議会民俗芸術プログラム・ディレクターのロバート・バロン氏に、文献の提供等のご高配を賜った。ここに同氏に対して感謝の意を表す。

《注》

(1) 小長谷英代は、アメリカの民俗学が、今日学部再編の動きのなかで強い危機感を抱き、人文社会科学領域や社会のなかでの民俗学の位置について議論が交わされており、その根本に「フォークロア」という表現の問題があることを指摘している。小長谷によると、「英語の一般社

会の用法では、『フォークロア』は、誤謬、虚偽、喪失といった否定的ニュアンスを含み、また学問領域の名称としても同様のイメージを連想される。その根底には民俗学が近代ヨーロッパで『フォークロア』を過去からの残存 (survival) として概念化してきた歴史がある。アメリカの民俗学者は、民俗学に対するこの不名誉な「誤解」を払拭すべく……過去の『残存』から抜けだし、現代の文化 (expressive culture) の学問へと転換を図ってきた。しかし、たとえ今日の民俗学者がフォークロアを新たな概念に置き換えようと、フォークロアという言葉の歴史には、過去の意味が刻印され、繰り返し蘇るのである」という (小長谷 二〇〇九 八)

- (2) アメリカ民俗学の入門書として定評があるジャン・H・ブルンヴァン著『アメリカ民俗学の研究—イントロダクション』(*The Study of American Folklore: An Introduction*) [Brunvand 1968]の一九六八年の初版にはFolkloristicsの文字は見えないが、一九九八に改訂された第四版にはFolklore² [or Folkloristics]と付記する表現が見られる [Brunvand 1998: 3]。
- (3) 一九四九年に出た古典的な民俗学辞典であるマライア・リーチ編『ファンク&ワグナルズ版フォークロア・神話学・伝説スタンダード辞典』(*The Funk & Wagnalls Standard Dictionary of Folklore, Mythology, and Legend*) 第一巻 [Leach ed. 1949]には、「フォークロア」の定義として六ペーシにわたって二一ものアメリカ民俗学者の定義が並べられているほど、アメリカ民俗学における「フォークロア」に対する認識は多様である。また、現在のアメリカ民俗学においても、「フォークロア」の定義は一つに定まっていない。たとえば、AFSの公式ホームページで「フォークロア」とは、莫大で深い多局面をもった文化に与えられた名称である。この主題がいかに大きくて、かつ複雑かということから考え合わせると、民俗学者が多くの異なる方法で『フォークロア』を定義

し、解説することは不思議ではない。それは、簡単にいえばダンスの歴史を調べる歴史家のダンスに対する定義や、文化人類学者の文化に対する定義を考えればわかることである。どの定義も十分ではないし、また、そうあるべきでもない」(AFSホームページ: <http://afsnets.org/aboutfolklore/aboutFL.cfm> [2010.4.12])と述べるように、「フォークロア」を限られた一つの枠組みで固定化することは、現在のアメリカ民俗学でもあまり好まれていない。

- (4) これまで日本でPublic Folkloreが紹介される場合、八木康幸や小長谷英代のように「パブリック・フォークロア」とカタカナ表記されており、これまで筆者もそれと同様に使用してきた。また、飯島吉晴は、レギーナ・ペンディックスの著作の翻訳によってアメリカ民俗学を紹介するなかで「大衆民俗学」の訳語を用いているが、それは適切ではない。ちなみに、中国民俗学では「公衆民俗学」の語が当て嵌められている。近年、学問の公共性が叫ばれるなか、多くの人文・社会科学でpublicを冠する方向性が模索されているが、その邦訳には「公共」が共通して用いられていることから、本論では公共民俗学の訳語を用いることとした。

- (5) 「応用民俗学 (applied folklore)」という用語は、一九五〇年にラルフ・ビールズ (Ralph Beals) によって最初に使用された。応用民俗学は、民俗遺産の正しい評価を拡大し、マイノリティ集団の価値の正しい評価を増加させるフォーク・マテリアルの広範な普及行為としてとらえられている [Beals 1950]。ボトキンは、その語を一九五三年に用い、応用民俗学を、フォークロアがそれ自体を越えて何らかのために使用されることと定義している [Botkin 1953]。
- (6) バート・フラインタック (Burt Feintuch) は、Public Folkloreの語の印刷物における最初の使用を一九八八年のジェロルド・ハーシュ (Jerrold Hirsch) と指定するが [Feintuch 1993: 349]、それに先だってドーンソン (一九八二) によって既に使用されている。
- (7) アメリカ民俗学では、当初は、公共民俗学は「公共部門の民俗学 (public sector folklore)」や「応用民俗学 (applied folklore)」とはほぼ同義とされてきたが、近年ではアカデミック民俗学に属する研究者のなかにも、公共領域に参画するものが増えてきたため、必ずしも公共民俗学を公共機関や公共部門の所属者が行う民俗学的実践とは位置づけることはできない。より大きい民俗学の

公共化の観点からとらえるべきであろう。

- (8) この機関は、一九六五年にスミソニアンの人類学研究部と合併して、国立博物館 (現在の国立自然史博物館: National Museum of Natural History) のなかのスミソニアンのアントロポロジー・オフィス (Smithsonian Office of Anthropology) とした。
- (9) ドーンソンのフェイクロア論の成立とアメリカ民俗学への影響、さらにドーンソン流の公共民俗学批判に関しては、既に八木 (二〇〇三) によって精細な検討がなされているので、詳細はそちらを参照のこと。
- (10) 堀一郎は、一九五七年に米国人類学年次大会で、ドーンソンの「アメリカ民俗学の理論 (A Theory for American Folklore)」を聴講し、ドーンソンが説く「危機的」なアメリカ民俗学の状況—通俗化—を、同じような悩みを抱く日本民俗学に照らして関心をもっている。そして、「通俗化を図る人びと」へのドーンソン批判を素直に受け容れ、一九五八年日本民俗学会年会で紹介している [堀 一九五八]。当時、日本民俗学でもアカデミズム化が始まりつつあり、通俗的・好笑的な民俗学に対する反感がアカデミーに所属していた堀にはあったものと思われるが、ボトキンの通俗性の背後にあった民衆中心主義の実践性ま

では読み取ることができなかった。

(11) 米国大使館ホームページ: <http://aboutusa.japan.usembassy.gov/j/sasai-arts-folkarts.html> (2010.4.3)

(12) 公共民俗学が、政府機関との間で常に蜜月であったかという点と実はそうではない。実際は、政権の意向(予算削減など)に影響を受けながらその活動を縮小・拡大させてきた。したがって、アメリカの公共民俗学において政府の意向は大きな制約要因であり、それに公共民俗学者は敏感にならざるを得ず、ときにはその活動が政策のアドボカシーと化す場合もあった。なお、公共民俗学の政策的意義については小長谷(二〇〇六)に詳しい。また、アメリカにおけるフォークロアを含む文化政策の発展については、マルテル(二〇〇九)や片山(二〇〇八)で詳しく検討がなされているので、詳細はそちらを参照のこと。

(13) このカーシェンブラット・ギンブレットの論考では応用民俗学という表現が用いられており、公共民俗学という表現はなされていないが、応用民俗学をパブリック・セクターが担うものとして論証されていることから、公共民俗学と応用民俗学を同義として語られているところから差し支えなからう。

て、文化の担い手が自文化を操作の対象として、客体化して新たに生産し直し、その過程で自己のアイデンティティを形成する状況について研究がなされているが、ここでは他者としての研究者の問題を取り扱っている。それは公共民俗学が、文化やそれを担う人びとを操作可能なもののように扱うことであり、そのような文化と人びとの「もの化」が、民俗学者と、それらによって伝統を表象される地域の人びととの間に力の不公平を生み出しているとの批判もなされている(Baron 2010: 63)。それは表象する力が、伝統文化を大規模に構築する民俗学者(つまり公共民俗学者)の手中にあることに対する批判であり、また、その結果、民俗学者が地域における人びとの主体的実践を限定したり、否定したりすることにつながるという批判でもある。

(16) バロンは、ニューヨーク州芸術評議会(New York State Council on the Arts)の民俗芸術プログラムのディレクターであり、スピッツァーは、ニューオリンズ大学の教授であるとともに公共ラジオ「アメリカの道(American Routes)」の創設者であり司会者を務めている。二人とも生粋の公共民俗学者であり、この分野のオピニオン・リーダーでもある。

(14) ここでカーシェンブラット・ギンブレットは、アドボカシーをネガティブに見ている。それは、国家など活動の

スポンサーへの擁護という観点から生まれる否定的眼差しであろうが、本来、アドボカシーは中立的な用語なので、住民や民俗の担い手の権利擁護を意味する「アドボカシー」もあり得る。現在、この語は社会学などにおいては、弱者の置かれた状況を改善するために第三者の立場から関わり、当事者に代わって具体的な施策を提案する活動の意味でも使われている。むしろ行政に独占されていた政策決定を社会に開く上で評価できるガバナンスのあり方として、この語が肯定的に使用されていることに注意を払うべきである。その点からいって、民俗の担い手のために、民俗学者が地域社会に介入し、アドボカシー活動を担うことは十分にあり得ると筆者は考える。なお、アメリカ民俗学でも、このアドボカシーに関して議論がなされている(2004 *Journal of Folklore Research* 41-2/3, Special Double Issue: Advocacy Issues in Folkloreなど)。

(15) ここでは公共民俗学者が、人びとの文化を客体化して操作できるものとして扱う問題を意味する。文化人類学では「この cultural objectification という言葉を用い

(17) アメリカ民俗学では、ドイツ民俗学を相手に学史に名を留める重要な大きな国際会議をこれまで二回開催してきた。第一回目が一九八八年にアメリカ・インディアナ州のブルミントン(インディアナ大学所在地)で開催された「一九〇二世紀におけるフォークロアと社会的変質(Folklore and Social Transformation in the 19th and 20th Century)」と題する会議であり、ここでは公共民俗学という言葉は、まったく登場しなかった。すなわち、その後の十年間で公共民俗学は、アメリカ民俗学に急速に浸透したのである。

(18) その内容は1999 *Journal of Folklore Research* 36-2/3に Special Double Issue: Cultural Brokerage: Forms of Intellectual Practice in Societyとして特集掲載されている。

(19) とはいっても、このような公共民俗学の発展は、大学や研究機関に属するアカデミック民俗学と、公共民俗学との完全なる和解を必ずしも意味していない。現在でも、公共民俗学者とアカデミック民俗学者との間には、実践に対する考えの違いが少なからず見られ、実際は、アカデミック民俗学者は、公共民俗学者が政治的な関与を行うことや、地域文化に対して外部から介入すること

に違和感を抱き、公共民俗学者は、アカデミック民俗学者の学問の社会的影響力がほとんどないことに対し違和感を抱き続けている。現在ではあまり表面化しないものの、このようなアカデミック民俗学者と公共民俗学者との相互不信は、いまだ根強く存在しているのである。

《参考文献》

アンダーソン、R. W. 一九八五 「アメリカ民俗学の現状と展望—グーラシー・デク・モンテル・ダンデスなど」 『人類文化』五・六
 アンダーソン、R. W. 一九八六 「アメリカにおける民俗学の現状」 『民俗学評論』二六
 飯島吉晴 一九九〇 「アメリカにおける「民俗」概念の変容」 『国立歴史民俗博物館研究報告』二七
 飯島吉晴 一九九八 「アメリカ民俗学の成立と展開」 『講座日本の民俗学・Ⅰ—民俗学の方法』福田アジオ他編 雄山閣
 岩竹美加子編訳 一九九六 『民俗学の政治性』 未来社
 小長谷英代 二〇〇六 「民俗の表象におけるフォークロリスト／民俗学者の役割と公共文化政策」 『比較生活文化研究』一一二

村山淳彦 二〇〇三 「フォークナーとフォークローア」 『フォークナー』五
 八木康幸 二〇〇六 「パブリック・フォークローアと『地域伝統芸能』」 『関西学院史学』三三
 八木康幸 二〇〇三 「フェニクローアとフォークロリズムについて」 『日本民俗学』二二六
 山折哲雄 一九九五 「落口の中の日本民俗学」 『フォークローア』七 本阿弥書店
 Abrahams, Roger D. 1993a 'Phantoms of Romantic Nationalism in Folkloristics,' *Journal of American Folklore* 106(419), pp.3-37.
 Abrahams, Roger D. 1993b 'After New Perspectives: Folklore Study in the Late Twentieth Century,' *Western Folklore* 52-2/4, pp.379-400.
 Abrahams, Roger D. 1999 'American Academic and Public Folklore: Late-Twentieth-Century Musings,' *Journal of Folklore Research* 36-2/3, pp.127-137.
 Anagnostu, Yiorgos 2006 'Metaethnography in the Age of "Popular Folklore,"' *Journal of American Folklore* 119(474), pp.381-412.

小長谷英代 二〇〇九 「『残存』からの脱却—アメリカ民俗学の試み」 『現代民俗学研究』一
 坂井洲二 一九七一 「西ドイツにおける新しい動向」 『日本民俗学』七七

菅 豊 二〇〇六 「公共民俗学 (Public Folklore) の可能性」 (日本民俗学会第五八回年会発表)
 菅 豊 二〇〇八 「Folklore (アメリカ民俗学) と民俗学 (Japanese Folklore) の対照」 (第八三六回日本民俗学会談話会発表)
 菅 豊 二〇〇九 「公共歴史学—日本史研究が進み行くひとつの方向」 『日本歴史』七二八
 ダンデス、A. 他 一九九四 『フォークローアの理論』 荒木博之編訳 法政大学出版社
 ドーソン、R. M. 一九八一 (一九五九) 『アメリカの民間伝承』 坂本完春訳 岩崎美術社
 福田アジオ他編 二〇〇〇 『日本民俗大辞典・下』 吉川弘文館
 堀 一郎 一九五八 「岐路に立つ欧米の民俗学」 『日本民俗学会報』四
 堀 一郎 一九六〇 「アメリカ民俗学の現状」 『日本民俗学大系・Ⅰ』 平凡社

Baron, Robert and Spitzer, Nicholas R. eds. 1992 *Public Folklore*, Washington, Smithsonian Institution Press.
 Baron, Robert 1993 'Multi-Paradigm Discipline, Inter-Disciplinary Field, Peering through and around the Interstices,' *Western Folklore* 52-2/4, pp.227-245.
 Baron, Robert 1999 'Theorizing Public Folklore Practice: Documentation, Genres of Representation, and Everyday Competencies,' *Journal of Folklore Research* 36-2/3, pp.185-201.
 Baron, Robert 2007 'American Public Folklore—History, Issues, Challenges,' *Indian Folklore Research Journal* 5-8, pp.65-86.
 Baron, Robert 2010 'Sins of Objectification?: Agency, Mediation, and Community Cultural Self-Determination in Public Folklore and Cultural Tourism Programming,' *Journal of American Folklore* 123(487), pp.63-91.
 Beck, Jane C. 1997 'Taking Stock (AFS Presidential Address, 1996),' *Journal of American Folklore* 110(436), pp.123-139.
 Ben-Amos, Dan 1998 'The Name is Thing,' *Journal of American Folklore* 111(441), pp.257-280.

- Bendix, Regina 1998 Of Names, Professional Identities, and Disciplinary Futures. *Journal of American Folklore* 111 (441), pp.235-246.
- Bendix, Regina and Welz, Gisela 1999 Introduction: "Cultural Brokerage" and "Public Folklore" within a German and American Field of Discourse. *Journal of Folklore Research* 36-2/3, pp.111-125.
- Botkin, Benjamin. A. 1931 "Folk-Say" and Folklore. *American Speech* 6-6, pp.404-406.
- Botkin, Benjamin. A. 1939 WPA and Folklore Research: Bread and Song. *Southern Folklore Quarterly* 3, pp.7-14.
- Botkin, Benjamin. A. ed. 1944 *A Treasury of American Folklore: Stories, Ballads, and Traditions of the People*. New York, Crown Publishers.
- Botkin, Benjamin. A. ed. 1947 *A Treasury of New England Folklore: Stories, Ballads, and Traditions of Yankee Folk*. New York, Crown Publishers.
- Botkin, Benjamin. A. 1953 Applied Folklore: Creating Understanding through Folklore. *Southern Folklore Quarterly* 17, pp.199-206.
- Botkin, Benjamin. A. ed. 1955 *A Treasury of Mississippi*
- River Folklore: Stories, Ballads, and Traditions of the Mid-American River Country*, New York, Crown Publishers.
- Botkin, Benjamin. A. ed. 1960 *A Civil War Treasury of Tales, Legends and Folklore*, New York, Random House.
- Borofsky, Robert 2000 Public Anthropology: Where To? What Next? *Anthropology News* 41(5), pp.9-10.
- Brewer, Teri F. 2006 Redefining "The Resource": Interpretation and Public Folklore. *Journal of American Folklore* 119(471), pp.80-89.
- Briggs, Charles L. 1993 Metadiscursive Practices and Scholarly Authority in Folkloristics. *Journal of American Folklore* 106(422), pp.387-434.
- Brunvand, Jan. H. 1968 *The Study of American Folklore: An Introduction*, New York, W. W. Norton & Company, Inc. (1st edition)
- Brunvand, Jan. H. 1998 *The Study of American Folklore: An Introduction*, New York, W. W. Norton & Company, Inc. (4th edition)
- Bulger, Peggy A. 2003 Looking Back, Moving Forward:
- The Development of Folklore as a Public Profession (AFS Presidential Plenary Address, 2002). *Journal of American Folklore* 116(462), pp.377-390.
- Burawoy, Michael. 2005 For Public Sociology (ASA Presidential Address, 2004). *American Sociological Review* 70, pp.4-28.
- Burns, Thomas A. 1977 Folkloristics: A Conception of Theory. *Western Folklore* 36-2, pp.109-134.
- Chittenden, Varick A. 2006 "Put Your Very Special Place on the North Country Map": Community Participation in Cultural Landmarking. *Journal of American Folklore* 119(471), pp.47-65.
- Coe, Cati 2000 The Education of the Folk: Peasant Schools and Folklore Scholarship. *Journal of American Folklore* 113(447), pp.20-43.
- Combs, Rhea L. 2008 Catwalking through Culture: Notes from the 2002 Smithsonian Silk Road Festival. *Journal of American Folklore* 121(479), pp.112-123.
- Davis, Susan G. 2010 Ben Botkin's FBI File. *Journal of American Folklore* 123(487), pp.3-30.
- Diamond, Heather A. and Trimmillos, Ricardo D. 2008
- Introduction: Interdisciplinary Perspectives on the Smithsonian Folklife Festival*. *Journal of American Folklore* 121(479), pp.3-9.
- Diamond, Heather A. 2008 A Sense of Place: Mapping Hawaii on the National Mall. *Journal of American Folklore* 121(479), pp.35-59.
- Dolby-Stahl, Sandra K. 1985 A Literary Folkloristic Methodology for the Study of Meaning in Personal Narrative. *Journal of Folklore Research* 22-1, pp.45-69.
- Dorson, Richard M. 1950 Folklore and Fake Lore. *American Mercury* 70, pp.335-343.
- Dorson, Richard M. 1982 The State of Folkloristics from an American Perspective. *Journal of the Folklore Institute* 19-2/3, pp.71-105.
- Dyen, Doris J. 2006 Routes to Roots: Searching for the Streetlife of Memory. *Journal of American Folklore* 119(471), pp.19-29.
- Feintuch, Burt ed. 1988 *Conservation of Culture: Folklorists and the Public Sector*, Lexington, University Press of Kentucky.
- Felault, Kelly 2006 Development Folklife: Human Secu-

rity and Cultural Conservation, *Journal of American Folklore* 119(471), pp.90-110.

Fine, Gary A. and O'Neill, Barry 2010 Policy Legends and Folklists: Traditional Beliefs in the Public Sphere, *Journal of American Folklore* 123(488), pp.150-178.

Garlough, Christine L. 2008 On the Political Uses of Folklore: Performance and Grassroots Feminist Activism in India, *Journal of American Folklore* 121(480), pp.167-191.

Georges, Robert A. and Jones, Michael O. 1995 *Folkloristics: An Introduction*, Bloomington, Indiana University Press.

Hammer, Lynne 2000 Folklore in Schools and Multicultural Education: Toward Institutionalizing Noninstitutional Knowledge, *Journal of American Folklore* 113(447), pp.44-69.

Harlow, Ilana 1998 Introduction, *Journal of American Folklore* 111(441), pp.231-234.

Hirsch, Jerrold 1998 "Ancillary to the Study of People": The Presence and Absence of B. A. Botkin at Point Park College, *Journal of Folklore Research* 35-3, pp.279-294.

Hufford, Mary ed. 1994 *Conserving Culture: A New*

Discourse on Heritage, Urbana, University of Illinois Press.

Jackson, Bruce 1985 Folkloristics, *Journal of American Folklore* 98(387), pp.95-101.

Jones, Michael O. 1982 Another America: Toward a Behavioral History Based on Folkloristics, *Western Folklore* 41-1, pp.43-51.

Jones, Michael O. ed. 1994 *Putting Folklore to Use*, Lexington, University Press of Kentucky.

Kirshenblatt-Gimblett, Barbara 1985 Di folkloristik: A Good Yiddish Word, *Journal of American Folklore* 98(389), pp.331-334.

Kirshenblatt-Gimblett, Barbara 1988 Mistaken Dichotomies, *Journal of American Folklore* 101(400), pp.140-155.

Kirshenblatt-Gimblett, Barbara 1998 Folklore's Crisis, *Journal of American Folklore* 111(441), pp.281-327.

Kirshenblatt-Gimblett, Barbara 2000 Folklorists in Public: Reflections on Cultural Brokerage in the United States and Germany, *Journal of Folklore Research* 37-1,

pp.1-21.

Kodish, Debora 1993 On Coming of Age in the Sixties, *Western Folklore* 52-2/4, pp.193-207.

Leach, Maria ed. 1949 *The Funk & Wagnalls Standard Dictionary of Folklore, Mythology and Legend Vol. 1*, New York, Funk & Wagnalls Company.

Lloyd, Timothy 1997 Whole Work, Whole Play, Whole People: Folklore and Social Therapeutics in 1920s and 1930s America, *Journal of American Folklore* 110(437), pp.239-259.

Montenyo, Eric 1996 Divergent Paths: On the Evolution of "Folklore" and "Folkloristics," *Journal of Folklore Research* 33-3, pp.232-235.

Nusbaum, Philip 2004 Folklorists at State Arts Agencies: Cultural Disconnects and "Fairness," *Journal of Folklore Research* 41-2/3, pp.199-225.

O'Connor, Bonnie B. 1995 *Healing Traditions: Alternative Medicine and the Health Professions*, Philadelphia, University of Pennsylvania Press.

Oring, Elliott 1991 On the Future of American Folklore Studies: A Response, *Western Folklore* 50-1, pp.75-81.

Oring, Elliott 1998 Anti Anti-"Folklore," *Journal of American Folklore*, 111(441), pp.328-338.

Payne, Jessica M. 1998 The Politicization of Culture in Applied Folklore, *Journal of Folklore Research* 35-3, pp.251-277.

Peacock, James L. 1998 Anthropology and Issues of Our Day, *Anthro-Notes* 1(20), pp.1-5.

Proshan, Frank 2004 On Advocacy and Advocates, *Journal of Folklore Research* 41-2/3, pp.267-273.

Rahn, Millie 2006 Laying a Place at the Table: Creating Public Foodways Models from Scratch, *Journal of American Folklore* 119(471), pp.30-46.

Regis, Helen A. and Walton, Shana 2008 Producing the Folk at the New Orleans Jazz and Heritage Festival, *Journal of American Folklore* 121(482), pp.400-440.

Satterwhite, Emily 2008 Imagining Home, Nation, World: Appalachia on the Mall, *Journal of American Folklore* 121(479), pp.10-34.

Shudiner, David 1998 The Politics of Discourse: An Applied Folklore Perspective, *Journal of Folklore Research* 35-3, pp.189-201.

- Siporin, Steve 2000 On Scapegoating Public Folklore, *Journal of American Folklore* 113(447), pp.86-89.
- Straker, Jay 2008 Performing the Predicaments of National Belonging: The Art and Politics of the Tuareg Ensemble Tartin at the 2003 Folklife Festival, *Journal of American Folklore* 121(479), pp.80-96.
- Thomas, Jeannie B. and Enders, Doug 2000 Bluegrass and "White Trash": A Case Study Concerning the Name "Folklore" and Class Bias, *Journal of Folklore Research* 37-1, pp.23-52.
- Thompson, Krista A. 2008 Beyond Tarzan and National Geographic: The Politics and Poetics of Presenting African Diasporic Cultures on the Mall, *Journal of American Folklore* 121(479), pp.97-111.
- Trinillos, Ricardo D. 2008 Histories, Resistances, and Reconciliations in a Decolonizable Space: The Philippine Delegation to the 1998 Smithsonian Folklife Festival, *Journal of American Folklore* 121(479), pp. 60-79.
- True, Gala 1998 Introducing the Patient's Voice: An Applied Folklore Approach to Autonomy in Adolescent Health Care, *Journal of Folklore Research* 35-3, pp. 223-239
- Walle, Alf H. 1990 Cultural Conservation Public Sector Folklore and Its Rivals, *Western Folklore* 49-3, pp. 261-275.
- Watts, Linda S. 2007 *Encyclopedia of American Folklore*, New York, Checkmark Books.
- Wells, Patricia A. 2006 Public Folklore in the Twenty-first Century: New Challenges for the Discipline, *Journal of American Folklore* 119(471), pp.5-18.
- Westerman, William 2006 Wild Grasses and New Arks: Transformative Potential in Applied and Public Folklore, *Journal of American Folklore* 119(471), pp. 111-128.
- Zeitlin, Steven J. 2000 I'm a Folklorist and You're Not: Expansive versus Delimited Strategies in the Practice of Folklore, *Journal of American Folklore* 113(447), pp. 3-19.

編集後記 (263号)

今期理事会からの学会の国際交流事業に関して、地方や行政の現場には無関係な議論だとする声や、「野の学問」であった初志を忘れ、アカデミズム化に邁進する愚行だといった批判も、漏れ伝わってくる。しかし、国際交流と、それら是一向に対立するものではない。何処の国の「民俗学(者)」も、現実の社会といかに関係性を構築していけるか、今、ここに生きる人びとの現在を問い、その生活(生活世界)をいかにして捉えられるのか、また「学」として、いかに彼らと共闘できるのか、その問いの連続であった(「野の学問」という表現はないにせよ、在野性や実践性と強く結びついている)。中国や韓国の「民俗学」にしても、それらは深く民衆やその運動と共振し、現在と真摯に対峙し、対応しようとしている。それらを知るとき、果たして日本の民俗学は、真に社会と向き合おうとしてきたのか、対象を正視せず、対象(生活)にこちら側が用意した概念的構築物を押しつけたりしてはいなかったか、「知」を磨き上げ、鍛え上げて来ようとしてきたのか、むしろ、それらが私たちに突き返されてくる。(本号編集担当)

編集担当理事 安室 知 岩本 通弥 前田俊一郎 山本 質素
福原 敏男 坂本 要 湯川 洋司
英文担当 ヘイヴンズ・ノルマン

日本民俗学 第263号

2010年(平成22年)8月31日発行

編集兼 日本民俗学会
発行者

会 長 篠原 徹

〒113-0034 東京都文京区湯島4-12-3
TEL・FAX 03-5815-2265
E-mail folklore@pop21.odn.ne.jp
URL http://www.soc.nii.ac.jp/fsj/
振替口座 00100-3-536466

印刷所 朝日印刷工業株式会社
〒371-0846 群馬県前橋市元総社町67番地

会員頒布 会費年額 8,000円
(入会を希望する方は学会事務局までお問い合わせください。)

図(日本複写権センター委託出版物)

本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。

複写を希望される場合は、(中法)学術著作権協会(03-3475-5618)の許諾を受けてください。

日本民俗学

第263号(2010年8月31日発行)

目次細目

特集 海外の現代民俗学—欧米編

- 特集にあたって 1
- 現代ドイツ民俗学のプルーラリズム
—越境する文化科学への展開— 法橋 量 5
- 意識分析—民俗学の方法—
..... アルブレヒト・レーマン 31
(Albrecht LEHMANN 訳/及川 祥平)
- 人生記録研究・日常文化研究のテーマとしての科学技術
..... ゲリット・ヘアリン 57
(Gerrit HERLYN 訳/池松 瑠美)
- ヨーロッパとグローバル化—ヨーロッパ民族学の新たな挑戦—
..... ヴォルフガング・カシューバ 75
(Wolfgang KASCHUBA 訳/エルメル・フェルトカンプ)
- 現代アメリカ民俗学の現状と課題
—公共民俗学(Public Folklore)を中心に— 菅 豊 94
- パフォーマンス理論
—「ポスト」領域の民俗学— 小長谷英代 127
- 北アメリカで民俗学を学ぶ 吉村亜弥子 153
- 動員と実践のはざまから
—バード・ホンブルグの問い— 重信 幸彦 179